

市長あいさつ

金沢は、豊かな自然に恵まれ、歴史的な美しいまちなみが今に残るとともに、多様な伝統工芸が市民の暮らしに息づく日本でも比類なき手仕事のまちであります。こうしたまちの個性を貴重な財産として継承するとともに、未来に向けて新たな息吹を吹き込んでいくことが、「歴史に責任を持つまち」としての金沢の責務と考えています。

その基礎は、今から420年前、近世の日本において、この地域を統治した加賀藩主前田家によって確立されました。前田家の歴代藩主は、戦争を避ける一方、漆、金工、焼き物、染めなどの工芸や茶の湯、能、邦楽などの芸能を奨励しました。文化と結びついた工芸は、市民の暮らしに根ざし、美に対する豊かな感性と格調高い技芸を育むとともに、そこで培われた工芸職人の技へのこだわりや革新的意識は、現代の企業家精神へと受け継がれ、いくつかの特異な分野で高付加価値産業を創出してきました。すなわち藩政期以降、異文化や異業種との交流の中で、絶えず伝統に革新の営みが加えられ、このことによる付加価値の集積がまちを支えてきたという経緯があります。

今後、グローバル化に埋没しない個性を持った都市として、文化多様性の実現に寄与すべく世界の様々な都市との交流を進め、その個性を内外に発信していきたいと思っています。また、発展途上国などにおける工芸の振興や人材の育成をはじめとする国際協力や世界平和に積極的に貢献していきたいと考えております。

ぜひとも、そうした機会を提供していただけるよう、創造都市ネットワークへの登録について、特段のご配慮を賜りますようお願いいたします。

金沢創造都市推進委員会会長
日本国 金沢市長 山出 保



■ 概 要

(はじめに)

金沢市は21世紀の都市像として、創造都市の重要性を認識し、文化と産業の連環によりまちが発展してきた経験や、独自の創造都市政策の実績をもとに、クラフト創造都市としての登録を目指し、ネットワークの一員として、文化的多様性の実現と世界平和に積極的な貢献を図ることを期する。

(金沢の歴史と特徴)

人口45万人の中規模都市である金沢は、戦国武将の前田利家による城下町の建設以来、第二次世界大戦でも戦禍に遭わなかった日本有数の非戦災都市として、420年余にわたる平和のうちに、独自の武家文化を育み、伝統的なまちなみ景観や生活様式とともに、類まれな工芸が発展し、保存継承されてきた日本を代表する伝統的工芸都市である。

独自の武家文化は、今日の金沢の伝統文化（能、茶道）や食文化の底流となり市民の質の高い生活を維持し、歴史的に培われた金沢の精神風土が鈴木大拙や西田幾多郎などの様々な思想家を生み出した。

(金沢の伝統工芸)

現存する主な伝統工芸は22種類にのぼり、その多彩さは京都を凌ぎ、日本一であり、その特徴は以下の点にある。

第1に、加賀地域伝来の素材、技術に、先進地であった京都のデザインや技法などを融合し、独自の領域を確立し、京都よりも高い評価を受けていること。

第2に、武家文化独特の豪華さと、町衆の厚い信仰心などを背景とした繊細さの両面をもつ、加賀調のデザインが確立されていること。

第3に、現在まで、市民のくらしの中に工芸品が活かされ生活の質を高めるとともに、工芸的なものづくりの精神が産業にも生かされていること。

また、工芸作家は今日も金沢城址を中心に多数活動しており、伝統工芸分野における金沢の人口一人当たりの重要無形文化財保持者（人間国宝）の数は日本一の水準である。

代表的な工芸

名称	概要
加賀友禅	<p>加賀梅染に、江戸時代に友禅染めの祖である宮崎友禅斎が彩色を手掛けて以来、高いブランド価値を維持している。</p> 
金沢箔	<p>藩祖前田利家が箔の製造を命じて以来発展し、現在は金箔製造の99%を占めている。</p> 
金沢漆器	<p>藩細工所に呼び集められた蒔絵師、五十嵐道甫や清水九兵衛により技術が伝えられ発展した。</p> 

(現代の工芸)

金沢市は工芸を文化と経済の両面から積極的、継続的に支援しており、世界的な工芸コンペティションの開催や、国連機関との協働による発展途上国の工芸振興を目指す取組を進めている。

金沢市が工芸を重視し、産業界と協力しながら多面的な工芸産業振興に取り組んでいることは、予算面にも表れており、近年、金沢市の一般会計予算がマイナス傾向となっている中で、工芸関連予算については、プラス傾向が続いている。

また、人材の育成に関して特筆されるのは、学術文化を奨励し平和を希求する金沢という都市の精神風土の発露として、第2次世界大戦終戦から1年足らずで市立の美術工芸大学を設立し、後継者の育成に努めていることである。

さらに、伝統的な工芸に現代産業やハイテク技術を融合させ商品開発を進め、海外に発信していく新たな挑戦も進められている。

金沢市の文化政策は多面的で先進的な内容を持っており、文化関連経費(文化芸術・文化財)の歳出決算額に占める割合は、日本の自治体の平均が1%未満であるのに対し、金沢市では約3~6%を占めていることにも示されている。

(金沢の創造経済)

伝統に革新の営みを加えなければ、単なる「伝承」に堕してしまう。学術文化が経済に刺激を与え、付加価値を高め、発展した創造経済がまた学術文化を支えるという、文化と産業の連環によって金沢というまちはつくられてきた。

工芸的なものづくりの精神は、江戸時代のからくりから繊維工業と繊維機械工業の両輪による独自の産業革命を可能とし、数多くのニッチトップ企業を生み、それらが地域内で緊密な連携をとって発展し、現在ではコンテンツ分野等の新領域で活躍する企業も登場している。

これらの企業による文化的投資と、工芸品に親しんだ市民の質の高い生活を背景とする高感度の消費市場によって金沢独自の文化と産業の連環による創造経済が生み出されている。

金沢市はすでに、経済界と市民、行政が手を携えて、官民一体となった創造都市への取組を進めており、さらに、今般のクラフト都市への申請にあたっては、行政と工芸団体、経済団体、市民団体からなる金沢創造都市推進委員会が組織されている。

(おわりに)

ユネスコ創造都市ネットワークに金沢市が登録されることは、以下の点で、日本やアジアをはじめ、世界の都市と市民にとって大きな意義がある。

第1に、アジア、特に日本におけるクラフト都市の登録が文化的多様性の実現に資すること。

第2に、世界の都市の中で、大多数を占める人口30~50万人規模の都市の代表となりうること。

第3に、化石燃料を大量に消費しない工芸・手仕事のまち金沢は、地球規模の課題である環境面からもネットワークの発展に貢献できること。

そして、第4に、これまでの独自の創造都市政策を、さらにネットワークを通じて展開していくことで、世界、特に発展途上国の工芸振興、ひいては世界平和の実現に貢献ができること。

また、他のユネスコ創造都市とともに、金沢市は、市場における芸術家同士の交流やネットワークのメンバーが経験できるクリエイティブ・ツーリズムの機会を創り出すこと、さらに、ユネスコ創造都市のメンバーの間で革新的な技術のデザインを高めるための工芸技法についての交流といった分野に参加していくよう心がけていくこと。

目次



はじめに 07

I. 金沢の歴史と特徴 13

- (地理) 14
- (歴史) 15
- (文化的生産) 17

II. 金沢の伝統工芸 21

- (1) 工芸都市としての金沢 22
- (2) 主な伝統工芸品 23

III. 現代の工芸 38

- (1) 工芸の振興政策 39
 - (多様な主体による取組) 39
 - (現代工芸の新たな可能性) 42
- (2) 工芸振興の基盤 44
 - (人材養成機関) 44
 - (工芸に関連する諸施策) 48
 - (新しい文化創出の拠点) 50

IV. 金沢の創造経済 52

- (1) 創造経済における工芸の役割 53
 - (地域内発型企業の発展) 53
 - (文化的投資・消費) 57
 - (新たな創造産業の展開) 58
- (2) 官民一体となった創造都市への取組 59

おわりに 61

【参考資料】 63

- ▼金沢創造都市推進委員会名簿 63
- ▼金沢の主な伝統工芸(22業種) 65
- ▼工芸関連団体の現況 70
- ▼団体等のホームページ 72
- ▼金沢美術工芸大学の変遷 73
- ▼金沢美術工芸大学の卒業生数(デザイン及び工芸) 74
- ▼金沢美術工芸大学の卒業生たちの活躍状況 75

【別添】 78

- ▼世界工芸都市宣言(1995年9月26日) 78
- ▼伝統工芸と環境に関する金沢アピール(1997年11月7日) 79
- ▼金沢アジェンダ(2008年10月17日) 84